

山中湖村山中地区を盛上げるための施策

所 属：西桂町役場

提案者：義城 優

1. 山中地区の課題点の抽出

- ・山中地区でのターゲット層は観光客をメインに構成されており、観光向けの施設としての需要や認知はあるが、地域に魅力的な資源があるにも関わらず、定住者が作り出す景観が特に若年層に認知されていない。
- ・山中湖畔の景観（サイクリングロードからの湖）に注目が集まりがちであるが、民家の前庭や構造物の素材等、歴史や魅力のある「今ある資源を活かすこと」にも着目したい。
- ・また、人口構成をみても老年人口（65歳以上）が年少人口（0～14歳）や生産年齢人口（15～64歳）を産業の面で支えている印象が強く、観光産業として充実してはいるが、「たてみち」など普段何気ない景色のなかで観光資源となり得るものを有効に若年層に引き継げる又は認知させる術を持ち合わせているか懐疑的である。

（※ 山中湖村人口ビジョンから私の考察）

- ・観光客だけではなく、村民が気軽に立ち寄れる飲食店が少ない印象を受ける。
- ・また、道路設計において休憩スペースが不足しており、歩行者にとっての憩いの場の創設を期待したい。

2. 山中地区の資源の抽出

- ・民家の前庭や構造物を形成している素材。
- ・湖畔と村道を繋ぐ「たてみち」の存在。
- ・山中湖の自然環境と調和する湖岸レクリエーション施設の景観。
- ・村を支える「やまなかこまちづくり実行委員会」の存在。

3. 山中地区でしか成立しないこととは？

- ・当初、湖畔沿いの景観を眺めることを目的とした観光客に「たてみち」を通じて、民家の前庭や構造物の素材等の資源に触れてもらい、来訪する度に新たな魅力を発見し、将来的に観光客から定住者へとシフトすること。

【イメージ】

観光 → 魅力を知る → 移住 → 定住 → 魅力を伝える側へ

4. 施策のテーマを考え、施策を考える。

テーマ：山中地区が目指す街は『リピーターから定住者へシフトする村』

(1) 今ある資源を活かす（ソフト）提案

- ・PRを目的とした山中湖村山中地区のクリーン作戦（ゴミ拾いを通じて村の魅力を体感）

村内の美化活動を通じて村が綺麗になることで、住民や地元の店舗などが自主的に清掃活動に取り組んでいく。その結果、各年代の住民が交流するきっかけ作りを提供できる。地域での会話を増やし、若い世代に浸透していくような狙いを持つ。また、ゴミ拾いを通じて村内にある魅力を再発見することで若い世代が空き家や空き店舗を活用（飲食店等へリノベーション）して活躍している事例を増やすよう働きかける。また、この募集の範囲を地域住民だけではなく観光客にも広げ、全国へ発信していく。

住民が主体で行ってきた取り組みに対して観光客を巻き込んでいくイメージを持つ。このような活動を基盤に全国に募集をかけることで山中地区では地域住民と観光客とが一体となった取り組みをしていると話題を提供することができる。

募集の要件はさほど重要ではなく、あくまで山中地区を知ってもらうきっかけ作りに重点を置く。

※基本的に住民（まちづくり実行委員会等）が主体となるが、軌道に乗るまでは行政でも問い合わせ窓口の設置などの支援を行うことが望ましい。

○ 美化活動に参加した際の特典例

- ・参加者には山中地区の飲食店等で使用できる食事券を提供。
（若い世代を集めるため、平成生まれには食事券の額の増額などのメリット措置を検討。）
- ・リピーターを確保するため、施設利用のスタンプカードを発行。
- ・空き家や空き店舗のリノベーション費の助成を受ける資格を得る。（※年数回参加）

● 空き家や空き店舗を利用した際の要項例

- ・店舗の経営者はまちづくり実行委員会へ加入。
- ・空き家や空き店舗のリノベーション費の助成を受けるには美化活動参加を要件に組込む。
- ・美化活動への参加で提供される食事券やスタンプカードの指定取扱店に位置づけられる。

etc . . .

(2) 資源を改善して活性化させる（ハード）提案

- ・道路利用者（湖畔を眺める歩行者や沿道の店舗経営者）が満足する道路設計。
以下の3点を意識した道路設計とする。

① 休憩スペースの創設

沿道を歩行者にとって居心地の良い道路空間となるように休憩スペースにベンチを設置し、ホスピタリティのあふれる空間を意識する。景観と村の魅力から考えるベンチの重要性を意識し、歩行者をもてなすようなベンチの配置を検討していく。



※ベンチの配置は湖畔と村道が見える視点に設置

写真-1 ベンチの設置

② ゲシュタルト舗装の導入

湖沿いの観光客エリアや村道沿いの住民エリアに歩行者が歩いていて楽しい又は歩きたくなるような舗装を整備していく。その際に意識しなければならないことが村道沿いの歴史性に十分配慮すること。いくら楽しい雰囲気を出しても湖畔の景観及び民家の前庭、又は既存の構造物等を阻害しない配慮が必要となる。



※湖畔や村道の歴史性を阻害しない配慮が必要

写真-2 ゲシュタルト舗装

(写真-2 は Web サイトから引用)

③ 「たてみち」の魅力を最大限に伝える

上記で述べた①休憩スペースの創設や②舗装の整備を有効に活用し、今ある資源のひとつである湖畔と村道を繋ぐ「たてみち」へと誘導する仕組み作りを充実させる。

例えば、休憩スペースをわざと「たてみち」が見える視点に創設し、ベンチの配置を観光客が迷い込みたくなるような角度に設置する。また、舗装を整備し、路面に注意を向けさせることによって既存の「たてみち」との差別化を生む。誘導する仕組みさえできていれば観光客は自然と別の「たてみち」を通りたいと好奇心のような感情を抱きやすい。これらの点を意識して住民のみならず全国の観光客に対して山中地区の魅力を伝えていく。



※湖畔と村道の位置関係を考慮した検討が必要

図-1 山中地区の「たてみち」の位置

(図-1 は山梨県都留郡山中湖村山中地区の集落構造に関する考察-たて道の変容に着目して-から一部引用)

(3) システムの提案

- ・過去3回（第3回～第5回）実施した現地研修（松本・妻籠・忍野）を受講して感じたことだが、運営についてはボランティア団体の活動だけでは限界があり、先進地では利益を生み出す組織が存在した。山中地区においては安産祭りやどんど焼きなどの文化が今もなお残っており非常に地域の結びつきが強い地区であると感じる。その点をストロングポイントとして注目し、住民の総意による区費をまちづくり実行委員会の運営資金に一部充て、モデル事業として行政が支援してみてもどうか。中・長期的な目標を設定し、定住者が増えるような一定の効果があればまちづくり実行委員会をNPOなどの法人化として検討していく必要がある。定住者が増えれば行政・住民・観光客の関係性は深まり、まちづくりを運営する上で必要となるコミュニケーション問題は解消される。